

## 現代における敬語使用と

### 規範意識の変遷

博士後期課程三年 鈴木 智映子

本発表は、近現代敬語史研究の一環として、戦後の敬語使用と敬語意識の変遷について考察を試みたものである。

戦前の絶対敬語から戦後の相對敬語への変化については、既に多くの研究者の指摘するところであり、戦後の敬語についても多くの研究がなされている。しかし、それらは、共時的な敬語の特質や問題点の指摘にとどまっており、終戦から現代までの流れを見通す通時的研究は管見によれば見あたらない。そこで、戦後の敬語使用や敬語規範意識の変遷について、具体的な言語事象を提示し、実証的に考察を加えることを本研究の目的とする。

戦後の敬語の変遷を通時的に見ると、二つの転換点があることが、筆者のこれまでの調査で明らかになっている。二つの転換点とは、i 昭和三十―四十年代における変化、ii 平成における変化、である。本発表では、i 昭和三十―四十年代の敬語の実態を取り上げ、この時期における敬語の変化が、その後の敬語をどのように変

えることとなったかについて分析を行うことにした。

昭和三十―四十年代というのは、日本経済の復興が軌道に乗り始め、高度経済成長期へと進んでいく時代である。この時期の社会構造の変化として、日本社会の構造的変化（農村型社会から都市型社会へ）、人口の都市集中、第三次産業の隆盛、高学歴化社会、経済大国化、などが挙げられよう。このような日本社会の変化は、敬語の使用状況にも必然的に影響を及ぼすことになるわけであるが、敬語の使い方の基準が変わっていく時代であり、敬語使用の過渡期ともいえるこの時代には、様々な「敬語の混乱」が指摘されている。大まかにまとめると、①家庭内敬語の衰退、②さまざまな誤用、③敬語の濫用――商業敬語や幼稚園ことば、④敬語使用の要因の複雑化――職場の敬語、等がある。本発表では、ラジオドラマ台本や新聞・雑誌等の言説をもとに、①の家庭内敬語の衰退を中心に考察した。結果は以下の三点にまとめられる。

- (1) 戦前は、子から親への会話の中では、何らかの敬語が用いられている。年上の兄弟に対しても、用いられている例が多くある。家庭の中で身分の上下、年齢の上下がはっきり現れた結果となっている。
- (2) 戦後、昭和二十年代、三十年代前半においては、家庭内で敬語を使用すべきである、という現象が見られる。ただし、戦前とくらべると、尊敬語・謙讓語の減少、丁寧語使用の増加が見られる。
- (3) 家庭内の敬語は四十年代に入ると減少する。